

■Feature article

中日友好病院訪問合同カンファランス記録

大西 真裕、吉田 理香

東京医療保健大学大学院 感染制御学

The Conference Minutes of China Japan Friendship Hospital Visit

Mayu Onishi, Rika Yoshida

Division of Infection Prevention and Control, Postgraduate School Tokyo Healthcare University

日程：2014年3月22日（土曜日）10:00～12:00

場所：中日友好病院（China Japan Friendship Hospital）

参加者：東京医療保健大学大学院教授：小林寛伊、大久保憲、同大学院准教授：吉田理香

亀田総合病院地域感染症疫学・予防センター副センター長：吉田真紀子

東京医療保健大学大学院修士課程：萱嶋すが、神明朱美、鈴木美千代、石井幸、別宮尚美、田中加津美、大西真裕

1. 施設概要

中日友好医院は1984年に開院し、今年30周年を迎えた。中日友好医院は中国衛生部直轄の国立総合病院として運営されているが、日本政府開発援助(Official Development Assistance 以下 ODA)の支援によって開院し ODA 関連医療施設としては最大級の病院である。病院玄関前には、中曽根康弘氏、鈴木善幸氏が植樹した木があり、30年に渡る中日友好病院の歴史を感じることができる。

東洋医学と西洋医学の双方を備えていることが特徴で、病院は病床数1500床、医療従事者は約3000人、うち看護師は約1100人である。外来診療は年中無休でAM8:00～PM8:00行っており、1日の受診患者は約8000～10000人である。国際診療部と称する外国人専用外来および入院病棟を有している。



中日友好医院正面で撮影



日本国内の医療系大学および企業からの支援協力を記したパネルが掲示されている。



中日友好医院のシンボルは万里の頂上と富士山をモチーフとしてデザインされている。



漢方薬専用処方窓口にて撮影

漢方薬を処方する医師、製剤を行う薬剤師は専門の国家試験が必要であるため、漢方薬と西洋薬品の処方場所がそれぞれ存在している。

2. 感染疾病科 徐潜教授より病院説明と質疑応答

感染疾病科は外来での感染症治療および院内発生の感染症の治療および管理を行っている。2003 年の重症急性呼吸器症候群(Severe Acute Respiratory Syndrome;以下 SARS)発生の際は拠点施設となり専用施設と専属スタッフで治療を行った施設である。

1) 質疑応答

- 質問 (大久保)：感染症専門棟を現在はどうのように使用しているのか？

回答 (徐)：院外感染症対応と院内感染に対する対応や抗菌薬の使用状況の把握や感染症の治療に従事している。感染疾病科は院内で独立した部門として機能し、以前は感染制御に関しては主に看護師が担っていたが、近年では医師も携わっており、専門的に従事するスタッフが増えた。来院患者の感染症、病棟で発生する基質特異性拡張型 β ラクタマーゼ産生菌 (extended-spectrum β -lactamase 以下、ESBL) やバンコマイシン耐性腸球菌 (Vancomycin Resistant Enterococci 以下、VRE) 等にラウンドし、他診療科へのフォローも随時実施している。また、SARS やインフルエンザなど、発熱症状を伴う疾患の治療を担当する。中国 CDC の定める指定感染症以外の新型ウィルスに関する研究を進めている。現在、中国衛生部も感染予防に力を入れている。

- 質問 (石井)：感染制御チームの編成やシステムを教えてください。

回答 (徐)：感染疾病科には医師 9 名、看護師が 13 名。感染制御疾病科として薬剤部も関わっている。抗菌薬の適正使用に関する委員会、感染制御委員会を設置している。

- 質問 (別宮)：感染制御に関する実践指導を職員に周知徹底するための方法があれば教えてください。

回答 (徐)：感染制御に関しては、スタッフ全員の教育が必要である。年 1 回のシンポジウムを開催しているが、約 3000 名のスタッフを一度に指導するのは困難である。シンポジウム他、各部署、数名の医師、看護師を担当者として教育を行い、その後、担当者が部署で教育を行うシステムをとっている。国際的なシンポジウムの開催も行っている。しかし、各診療医師は多忙を理由に関心が低い状況があり、一方的な教育では効果が不十分になり、今後の課題である。

- 質問 (小林)：具体的な抗菌薬の使用状況についてお聞かせ願いたい。

回答 (徐)：感染疾病科の取り組みによって入院患者に使用する抗菌薬の使用率が 70% から 40% に減少した。また、周術期患者への抗菌薬使用に対しても指導を行い、1 類手術では使用率が 90% から 30% 程度へ減少した。手術の際に使用する抗菌薬使用状況についても 1 類手術では 1 日～48 時間投与が実施されている。

- 質問 (萱嶋)：感染疾病科に所属している看護師は感染制御に関する資格を有しているのか？活動内容を教えてください。

回答 (徐)：院内感染を担当するスタッフと感染疾病課は別な施設が多い。感染疾病科とは別に院内感染対策を担当する部署があり、そちらには看護師 8 名が常在している。

- 質問 (鈴木)：手術室数と手術件数、看護師人数、また、手術部や滅菌供給部と感染疾病科の連携について教えてください。

回答 (徐)：手術室看護師の状況に関しては、把握していない。手術部、重症集中ケア病棟などの重要部署に対する教育については重点的に実施している。

手術室には 1 名の感染制御専門看護師が在籍しており、麻酔科医と協働し抗菌薬の使用方法を監督している。滅菌部門は中央化し管理されている。加えて手術室や内視鏡室は感染疾病科が指導監督を行っている。

3. 院内視察 (国際医療部)

国際医療部の病棟を視察。国際医療部は患者が母国の保険を使用して診療を受けることができるなど外国人専用病棟である。国際医療部には日本での研修経験があり、日本語で会話ができる看護師や医師が在籍している。

謝辞

今回の中日友好病院研修調整にご尽力下さった、サクラ精機株式会社東竜一郎社長に深謝いたします（小林寛伊）。